



監督=ピーター・ジャクソン/
 出演=イライジャ・ウッド/イ
 アン・マッケラン/ヴィゴ・モ
 ーテンセン/ショーン・アステ
 イン/オーランド・ブルーム/
 ジョン・リス=デヴィス/バ
 ーナード・ヒル/リヴ・タイラ
 ー/ミランダ・オットー (日本
 ヘラルド映画、松竹配給/2003
 年アメリカ映画/203分)

いよいよ『ロード・オブ・ザ・リング』第3部の上映。作品賞・監督賞など、アカデミー賞最多の11部門にノミネートされた全3部、一大叙事詩の完成だ。戦闘シーンは大迫力、そして画面も美しく、壮大なドラマであることはよくわかるが、お話が複雑なことは、前2作同様。そしてとにかく長い。さらに、長い長い旅が終わった後のエンディングは……？ ああ、疲れた。

🎬 いよいよ完結編

第1部『ロード・オブ・ザ・リング—旅の仲間—』、第2部『ロード・オブ・ザ・リング—二つの塔—』に続く、第3部『ロード・オブ・ザ・リング—王の帰還—』を観た。こうして並べてみると、ちょうど1年ごとに1本ずつ観たことになる。第1部は「尻切れトンボ」で、観終わった途端に「ええ〜！」という声が充満したが、さすがに第2部はみんな勉強しており、それなりの反応があった。そして第3部は人気上々。第2部も約3時間と長かったが、第3部はさらに長く、3時間23分。いやはや超大作だが……。

🎬 必要不可欠な基礎知識

この映画の理解のために必要不可欠な基礎知識は前2作でも紹介したが、第3作目ともなればさすがに要領よく整理されており、多少はわかりやすい。しかし、以下念のため、最低限必要な知識だけ整理しておきたい。

まず第1に、「旅の仲間」とは、邪悪な指輪を「滅びの山」の亀裂に捨てにくくするために結成された長い長い旅の仲間たち。この旅の仲間は、今、3つのグループに分かれている。第1グループは「滅びの山」へ指輪を持っていくホビット族のフロド（イライジャ・ウッド）とサム（ショーン・アスティン）。そしてここには第2部で登場したあのケッタイな動物(?)「ゴラム」がいる。第2グループは、白髪の魔法使いガンダルフ（イアン・マッケラン）とホビット族のメリーとピピン。そして第3グループはアラゴルン（ヴィゴ・モーテンセン）、レゴラス（オーランド・ブルーム）の勇者とその「付録」としてついているギムリ（ジョン・リス＝デイヴィス）。

第2は、「闇の勢力」の理解。そのボスは、冥王サウロンだが、この闇の勢力に結集する兵隊(?)たちは、まずはオーク（第一紀に大魔王モルゴスによって創り出された醜く性悪な種族）。さらに、武装したトロル（人間の倍の背丈を持つ太古の生物）や象に似た巨大な獣ムマキル（ホビット語ではオリファント）とそれに乗ったハラドリム（ハラド人のこと）と呼ばれる南方の人間たち。そして空にはキャンキャン声（キーキー声？）を出す始祖鳥みたいなケッタイな鳥で、固有名詞も与えられず「おぞましい獣」と呼ばれる怪鳥に乗るナズグル（オークの言葉で「指輪の幽鬼」の意）たちもいる。この気色悪いバケモノたちの説明は、ここではこれ以上は省略だ。

第3は、「白の勢力」として、旅の仲間とともに冥王サウロンに立ち向かう人々たち。今回第3部で活躍する最大のスターは、人間の国、ローハン国の国王であるセオデン王（バーナード・ヒル）。そしてその姪のエオウィン（ミランダ・オットー）の2人だ。また、ちょっと悪役になってしまうのが同じく人間の国、ゴンドールの執政であるデネソール。これくらいの基礎知識は、この第3部を理解するために最低限必要だ。

ストーリーの本筋は指輪を投げ捨てるための旅

ストーリーの本命は、第1グループのフロドとサムによる「滅びの山」の亀裂に指輪を投げ捨てるための旅。指輪を持つフロドは、邪悪なゴラムの策謀の影響を受けて、親友のサムを疑い一時的にサムと別れるというスリリングな状況を経

ながらも、最終的には大成功！ これによってすべては解決することになる。もっとも、この旅がスナリ行ったのでは面白くないから、今回第3部でこの旅を妨害し、待ったをかけようと登場するのは、巨大な怪物グモの「シェロブ」(巨大な蜘蛛のような古代生物)。スリル満点、ヘトヘトになっての最終到達点で果たしてフロドたちは……？

ゴンドールの首都、ミナス・ティリス

第3部での、ハード(建物)の主役は、人間の国、ゴンドールの首都、ミナス・ティリス。白い巨大な石造りの城砦で、ここには一体何万人の人たちが住んでいるのかと思うほど巨大な城。というより巨大なまちそのものだ。野っ原に1つだけポツンと存在する巨大な城砦(まち)だから、水や食料はどうやって補給するのか、さらに下水道は？ など、都市計画的な観点から考えれば大いに疑問があるが、そんなことはこの際どうでもよいこと……。

ここを守るのは、ゴンドールの執政デネソール。ホビット族のピピンが発見したバランティア(サルマンが使っていた遠くを見る石)によって、ガンダルフは逆にサウロンがゴンドールのミナス・ティリスを攻めることを知った。そこでガンダルフは急いでミナス・ティリスに駆けつけ、デネソールに対してサウロンからの攻撃に備えて、同じ人間の国のローハンの応援を求めるよう勧めた。しかし、ローハン軍とともにゴンドールの王の末裔であるアラゴルンがやって来て、執政の地位が脅かされることを恐れたデネソールはこれを拒否。しかしガンダルフは、一計を案じて、烽火^{のろし}に点火。ローハンへの応援の意思表示をした。山々に備えつけられた烽火が次々と点火されて、情報が伝わっていく姿は見事なもの。烽火が、紀元前12世紀のトロイ戦争の際、城内攻撃の合図に使われたことは有名。また、中国でも紀元前2世紀の漢の時代に匈奴の攻撃から国を守るため、烽火台がシルクロードに点在していたことはよく知られている(ちなみに私は2001年の敦煌旅行の際、この烽火台の残骸を実際に見学した)。

第1の戦闘場面はミナス・ティリス城の攻防戦

ミナス・ティリス城を攻めるサウロン軍と、息子の「死亡」に錯乱してしまっ

た執政デネソールに代わって、事実上城内の戦闘指揮をとるガンダルフ率いる Gondool 軍との攻防戦は、中世ヨーロッパでの城砦の攻防戦を見るようで、実に圧巻。石投げ機や高層のやぐら車さらには城門をつき破るための巨大な大道具などの大活躍は観ていて楽しいもの。しかし、いわば戦車みたいな巨大な怪獣ムマキル（オリファント）の登場や空を飛ぶ「おぞましい獣」によるいわば「空爆」は、ルール違反で、マンガ的。これではガンダルフがいくら頑張っても Gondool 軍が勝てないのは当たり前……？

第2の戦闘は広大な野戦（騎馬戦）

苦戦している Gondool 王国の都ミナス・ティリスに駆けつけたのは、セオデン王率いる人間の国のローハン軍。ローハン軍はベレンノール野でサウロン軍と激突だ。ローハン軍は馬に乗った騎士軍団だから、みんなカッコいいし、騎馬隊の力はうまく集中して使えばすごいもの。広野に展開するオーク軍の歩兵部隊からの最初の弓矢による攻撃を突破し、歩兵部隊に突入した騎馬隊は、これを蹂躪し、殺戮し、圧勝するかに見えた。しかし、そこに現れたのが、また、例によって「ルール違反」のムマキル（オリファント）や「おぞましい獣」だ。騎士団に対してこんないわば「戦車」や「戦闘機」を投入されたのでは、旗色が悪くなるのは当然。セオデン王やその姪エオウィンたちの必死の頑張りにもかかわらず、ここでもローハン軍は敗色濃厚となったが……。

アラゴルンもルール違反の「死者軍団」の投入

ローハン軍の騎士軍団の兵力が少ないことを恐れたアラゴルンは、かつてアラゴルンの祖先イシルドゥアに忠誠を誓いながら、その誓いを守らなかったために彷徨っている死者たちに対して、その義務を果たすよう要求するべく「死者の道」に入った。これに同行したのがレゴラスとギムリの2人。何とも気味の悪い、死者たちとの交渉の末、アラゴルンは死者たちに戦うことを誓約させ、これを引き連れて、ローハン軍が戦う戦場へと駆けつけた。「ペラルギア」の港に着いたアラゴルンたちを、サウロン軍のオークたちは味方の海賊たちが駆けつけてきたと思い込んだが、何とこれはアラゴルン率いる死者たちの大軍。これは強

い。何しろ姿が見えないのだから、バツバツとオーク軍をなぎ倒し、ベレンノールの野戦でも大勝利。そしてその勢いでこの死者軍団は、ミナス・ティリス城へも乗り込みオーク軍を退治し、結局は Gondool 軍とローハン連合軍の大勝利となった。もっとも、この野戦でローハン軍のセオデン王は名誉の戦死を遂げたが、その後を継ぐのは果たして……？

第3の闘いは危険な陽動作戦

旅の仲間たちの目的は、前述のとおり「滅びの山」の亀裂に指輪を投げ捨てること。フロドたちが苦勞しながら「滅びの山」に向かっていると信じているガンダルフやアラゴルンたちは、フロドが「滅びの山」に向かうため、サウロンの勢力を自分たちに引きつけておくという危険な「陽動作戦」にあえてチャレンジした。冥王サウロンが支配するモルドールの国の正面にある黒門に到着したアラゴルンたちの軍団に対し、黒門の中から大展開してきたオークの軍隊は、圧倒的な多数。これではアラゴルンたちは生きて帰れる見込みはない。「ここが最後！」と覚悟を決めてオーク軍団と切り結ぶアラゴルン、レゴラス、ギムリ、そしてガンダルフたち。

しかし、その時、フロドはいよいよ「滅びの山」の中に入っていた。そこで展開されるフロドとゴラムとの最後の闘い。そして指輪は、ゴラムの身体とともに「滅びの山」の亀裂の底へ沈んで行った。すると……？ ここからは、いよいよサウロンの最後だ。そのクライマックスの崩壊シーンをたっぷりと楽しもう。

ハッピーエンドも難しい

これだけの超大作・3部作だけに、ハッピーエンドとはいっても、その結末のつけ方は難しい。ハッピーエンドの第1は、フロドを中心としたホビット族4人のふるさとホビット庄への帰国。ここでフロドは『旅の物語』の執筆に没頭し、ほとんどこれを完成させたが……。またサムはここで結婚し、2人の子供に恵まれることに……。

ハッピーエンドの第2は、アラゴルンが晴れて人間の国 Gondool の国王に就任したこと。これによって、中つ国の第3紀が終了し、新たに第4紀が始まるこ

とになったわけだ。しかもこれは、同じ人間種族であるセオデン王の姪エオウィンの想いを断ったうえ、種族を超えたアルウェン（リヴ・タイラー）との恋の成就によるものだから、二重のめでたし、めでたし。

ところが、ここでよくわからないのは、第1部で登場したホビット族の長老ビルボが、闇の森を治めるエルフの世界へと旅立つこと。そして何と、その後を追うかのようにフロドまでもエルフの世界へ……。そしてフロドは、途中まで自分で完成させた『旅の物語』の後の執筆をサムに依頼する。

一体これは何を意味するのだろうか……。ひょっとして、これは次の作品への布石……。ここまで超大作を完成させたのだから、もうこれ以上、「思わせぶり」なことはやめてほしいものだが……。3時間23分を観終わった感想は、「ああ疲れた……」というもの。そしてこの映画評論を書き終えた感想も「やっ」と書けた……」というもの。超大作とは疲れるものだ……。

2004(平成16)年2月23日記

ミニコラム

大作映画あれこれ

『ロード・オブ・ザ・リング』3部作は合計約9時間半の大作だが、大作は他にもある。日本では、五味川純平の原作を映画化した『人間の条件』(59~61年)全6巻と『戦争と人間』(70~73年)全3巻がその代表でいずれも合計約9時間半。中国映画の大作は、中国東北部の都市、瀋陽における巨大な国営工場の衰退を約9時間のドキュメントタッチで描いた王兵監督ワン・ビンの『鉄西区』(03年)。これらはいずれもオールナイト上映に最適。

また、文豪トルストイの名作『戦争と平和』を映画化したオードリー・ヘプバーン主演の『戦争と平和』(56年)は208分とコンパクト(?)だが、本場ソ連がリュドミラ・サベリーエワをナターシャ役に起用した『戦争と平和』第1部・第2部(65年・67年)は、合計431分という長大なもの。これも時々一挙上映されるから、そんな機会があれば逃すことなくチャレンジしたいもの。まちががなくしんどいものの、充実感に浸れることも確実!